

慈雲の正法運動

沈 仁 慈

I、初めに

梵学研究を始めとして、戒律復興運動や十善戒による民衆教化、また雲伝神道の創始など、多分野にわたって活動を行つた慈雲は、近世仏教史に大きな足跡を残した人物の一人である。しかし、その業績にもかかわらず、慈雲に関する従来の研究は非常に乏しく、しかも、正法律運動や十善戒に関するものが大勢を占めている。慈雲は仏教のみならず神道にも通達していたが、いずれの分野においてもその基盤を為していたのは「正法思想」である。ここで「正法思想」というのは、仏陀自身の行じた法こそ仏教の本旨と考える思想のことである。この観点に立つ時、慈雲の行つた正法律運動や人道教としての十善戒の提唱、また神仏一致説に基づいた雲伝神道までも、「正法思想」の実践といえよう。

本論文は、慈雲の思想基盤である「正法思想」に焦点を当てて、彼の「正法」観とその具体的実践形態とを考察し、近

世仏教史に於いて慈雲の「正法運動」のもった意義について考えてみたい。

II、慈雲の正法観

慈雲は『修行道地經和訳』の中で「如來の正法滅尽せんと欲し、衆生の慧目なきを見るに、粉骨碎身すとも自らやむことあたわず」（『全集』十六、四五八―四五九）と述べ、正法維持の悲壮な決意を示している。ここで慈雲の言う「正法」とは如何なるものであろうか。

慈雲は、当時の仏教界について、「異執紛綸として互に是非し、悉く文字章句に泥むて実修実行の道廢す。沙門は唯剃髮染衣、無戒破戒にして、道を衒ひ法を売て、唯好飲食好衣服を好み、多財を以て有徳とし弁口を以て多聞とす。闔国唯無慚無愧にして淨持戒の人なく得通の者なし。」（同上、四五七）と、「相似の法」の世界であると見なしていた。この「相似の法」とは、仏（在）世及び賢聖在世の法でないもののこ

とである。逆に言えば、慈雲にとって正法とは、仏（在）世及び賢聖在世の法なのである。すなわち、正法とは「唯夕仏の行はせられた通りに行ひ、仏の思惟あらせられた通りに思惟する」（『全集』十四、三三二）ことである。

このような慈雲の正法観は、弟子諦濡が撰した『正法律復興大和上光尊者伝』の中にもっともよく顯れている。「毎ニ学徒ヲ誡テ曰ク、大丈夫兒出家入道ス。須ク仏知見ヲ具シ、仏戒ヲ持チ、仏服ヲ服シ、仏行ヲ行シ、仏位ニ躋ルヘシ。切ニ末世人師ノ行フ所ニ倣フコト莫レ。須ク淳粹ノ醍醐ヲ飲ムヘシ。雑水ノ腐乳ヲ飲ルコト莫レ。此レ尊者終身履踐スル所（ナリ）。故ニ亦是ヲ用テ以テ人ニ誨ユ也」（『全集』首卷、四五）すなわち、仏の保った知見を保持し、仏の護持した戒律を守り、仏の着用した袈裟を服し、仏の修めた行を行うことこそが慈雲の正法の本意をなすものである。

III、正法の実践

前項のような「正法」を回復するため、慈雲が行った実践を見ると、その内容によって以下の四つに分けられる。すなわち、仏知見を実践するためには超宗派運動と梵学研究を、仏戒を実践するためには正法律運動を、また仏服を実践するためには袈裟の裁制を、仏行を実践するためには修禪に勤めたのである。

では、これらの実践運動の内容について簡単に考察してみよう。

（一）仏知見の実践

慈雲は、各宗宗学の振興によって根強い宗門為主の動向を見せていた当時の仏教界に対して、当時の宗はいずれも末世にできた「相似の法」であると批判している。しかし、そうであるが、世俗の名聞利養を求めず、一心に各宗の本旨を修める修行の場においては、諸宗は悉く正法であると主張し、超宗派的立場をとった。

また、翻訳された經のみによっては仏意を取り損なうと見て、梵文の經典を用いることを勧め、さらに仏意の本旨を究明し、それを広く普及するために、『梵学津梁』というほぼ一千巻にのぼる膨大かつ組織的な梵語研究書を完成した。

（二）仏戒の実践

慈雲は、「清淨の比丘説戒の法壊せざる間は正法住す」（『全集』十四、三六五）という世尊の言葉を引き、正法は戒律を護持することによって維持できると見ていた。そのため、「律蔵戒学は唯世尊の自説のみにして、文殊弥勒も一字を贊くること能はず。迦葉舍利弗も唯祇奉（ジブ）を知ると云ことじや。」（同上、三六二）とのべ、宗派別に異なる戒律を持っていた当時の諸宗に対して、専ら仏の親説である律蔵戒学を尊重すべきことを主張し、正法律を唱えた。

(3) 仏服の実践

慈雲は、袈裟(剃髪を含め)は「諸仏之通儀、入道之初要、末世之真依、正法之柱礎」(『全集』一、八〇)であると見ていた。しかし、当時、袈裟は色や繡綺、裁縫等において悉く如法とは異なっていたため、慈雲は『方服図儀』等の著作を著し、袈裟の正儀を明らかにするとともに、法に叶った千衣の袈裟を裁制し、それらを普及した。

(4) 仏行の実践

慈雲において、生死解脱の通軌であり、「一切ノ声聞一切ノ縁覚、一切ノ菩薩一切諸仏ノ成道転法輪入涅槃、及ヒ所有ノ種々ノ功德悉ク此ノ中ニ在リ」(『全集』十五、七)とされた禅を修めることは、まさに仏行を実践することであつた。

慈雲は、禅浄は沙門の通式であり、みなが修めなければならないが、当時の仏教界では真言宗と禅宗を除いて、他の諸宗には坐禅の規則もないと批判している。慈雲は生涯にわたつて禅定を修める一方、禅関係の書物に対する和訳や注釈、講義等を行ない禅の普及に勤めた。

IV、まとめ

以上、慈雲における正法の定義とその実践について論じてきた。近世仏教の全般的傾向と比較するなら、慈雲の正法運動のもつ意義は次のようにまとめられよう。

(a) 慈雲の超宗派的立場は、各宗で重んずる經典や宗祖の言葉はすべて眞理として受け取られ、そこに批判的な観点の入る余地がなかった閉鎖的仏教に対して普遍的仏教を提唱するものである。

(b) 慈雲の実践重視の態度は、宗学の研鑽が盛んに行われる中で、実行より学問為主の動向を示していた教学的仏教に対して実践仏教を提示するものである。

(c) 仏陀の修行を手本とする慈雲の修行観は、宗学の振興によつて自宗の開祖を重んじる傾向の強かつた宗祖為主の仏教に対して根本仏教への回帰を唱えるものである。

すなわち、幕藩体制の下で政治的に規制を受け、形式化と変質化が進み、仏教のあり方とはほど遠いありさまを見せていた近世の仏教界に対し、慈雲の「正法運動」は仏教の本来の姿を取り戻そうとする仏教復興運動なのである。

〈キーワード〉 慈雲尊者全集、正法、仏世及び賢聖在世の法

(東京大学大学院)